今日はお十夜法要にお出でくださいましてご苦労さま、そしてありがとうございます。

皆さんのご先祖さまの御供養の為の年回法要を始め「お施餓鬼」「お彼岸」「お盆」「お十夜」沢山の仏事があります。もちろん、ご先祖様方の御供養の為でもありますが、半分は私たち自身の為の供養なのです。例えば私たちが行ないます年回法要は初七日から五十回忌までまたそれ以上の年回もございます。この年回法要といいますのは、私たちの大切なご先祖様がお浄土で食べるのに困っていたり、それどころか地獄に落ちていたりしていると困るので法事をするというのではありません。「法事をしないと祟られたら困るから」とおっしゃる方もありましたがそんな事は決してありません。

私たちの大切な方々。先にお浄土に旅立たれた方々は、阿弥陀様の御国であります西方の極楽浄土。そこに菩薩として蓮の台座に座っておられるのです。林宗院の御本尊阿弥陀様とその両脇におられます観音菩薩様、勢至菩薩様、あの方々と同じ所に同じようにして暮らしていらっしゃるのです。皆さんの大切な方々は皆菩薩さまなんです。

それを表現しているのが御位牌なのです。皆さんご自宅にお帰りなってお仏壇のお位牌をよくご覧になって下さい。いろんな型の違いはあっても必ずお戒名の下に蓮の花びらを表す装飾が施してあります。それが、阿弥陀様と同じように蓮の花びらの上に座っていらっしゃるという事を現わしているのです。観音様や勢至様のように仏様の形にはなっていませんが同じ極楽浄土にいらっしゃる菩薩様なのです。ですからお浄土におられる菩薩様方なのですから苦しみはありません。むしろ苦しみに満ちている世界はこの世なのです。菩薩様は極楽浄土でご自分の目指すもの、達成すべき目的の為にご修行しておられます。

その達成すべき目標とは何でしょう。一番望まれている事はなんでしょう。それは、この世に残してきた私達、皆さんのの幸せであり、達成すべき目標とは自らが仏となってすべての人々を苦しみから救う事なのです。

そして自らが菩薩となり住んでいる所と同じ場所、阿弥陀様のみ国、西方の極楽浄土に、菩薩として生まれて欲しいということなのです。よく私達は亡くなられた人の事を「仏様」といいますが、正確には仏になるために修行している「菩薩様」です。菩薩様は修行を重ねてやっと「仏」になるわけです。

法事といいますのは、私たちの幸せを休む間もなくいつも願っていて下さる菩薩様に対して「お陰様でつつがなく暮らしていられることへの感謝の気持ちで」また「必ずや道を間違う事無く、あなた様と同じ阿弥陀様のみ国に生まれる事が出来ますように、そして菩薩としてのあなたのご修行が、私たちが手を合わせあなたの事を思い、阿弥陀様にお願いする事で少しでも励ましとなって一日でも早く「仏様」になられますように、という気持ちで行なうものなのです。

つまり毎日毎日の皆さんの気持ちを年回法要に集約させて極楽浄土に届けることなのです。ご先祖が路頭に迷っていたら困るから法要をするのではなくて皆さんの中にお伝えしたい気持ちが有るから、自分を間違いなく導いて頂きたいから、今私たちが此処にある幸せを感謝しているから法要があるのです。ご先祖の為にお寺にお参りにいくけど、自分の生活にはお寺は関係ない、お寺は死んだ人の為の所であって、生きている人間には関係ないという考えがお寺イコールお墓という姿勢として現実に現れていると思います。

本日の「お十夜」もまさに私たちが自ら行う私たちの為の阿弥陀様に対する感謝のお勤めなのです。この「お十夜」と云う行事は今から五五〇年程前といいますから、室町時代の中頃になります。

浄土宗で最も大切な経典の一つである『無量寿経』の巻下に、「この世において十日十夜の間善行を行うことは、仏の国で千年間善行をすることよりも尊い」と説かれていることがお十夜の教義的な基礎になっているのですが、その教えを実践したものとして次の史実があります。

平貞国というお方が京都の真如堂というお堂にお篭りになって、三日間昼夜を問わずのお念仏をお称えになりました。そして、夢のなかで阿弥陀様よりお導きを頂きその感謝のお念仏を更に七日七夜続けられました。そのことに端を発し十日十夜、阿弥陀様に対して感謝の気持ちを表すお念仏会を「お十夜」と呼んでおります。そして、この「お十夜」が全国の浄土宗のお寺で十月、十一月に行われますのは、実りの秋の収穫を喜ぶ感謝の気持ちが、阿弥陀様に対する感謝の気持ちと重なったものと思われます。ですから私達の阿弥陀様に対する感謝の気持ち無くしてこの「お十夜」という行事は成り立たないのです。

　先ほど拝誦させて頂きましたお言葉は、観無量寿経というお経の一説を和文でおよみしたものです。法要の中で必ずお念仏を何回も繰り返してお称えするところがあります。お念仏を多くの人と共にお称えするという事で念仏一会と申しますがその前に必ず「光明遍照 十方世界 念仏衆生 摂取不捨」という偈文をお称えします。皆様も、ああその文句なら聞いた事が有るとお思いの方もいらっしゃるかと思います。

この偈文を読み下し文として先に拝誦いたしましたのが「如来の光明は遍く十方世界を照らして念仏の衆生を摂取して捨て給わず。」という所になるわけです。「阿弥陀様が発っしておられる光明は、すべてあらゆる世界を照らしておられて、お念仏を称える人々を一人残さず救いとって下さってお見捨てになる事は決してありません。」という意味です。

法然上人は、如来の光明を月の光に喩えられてこのお言葉を

月影のいたらぬ里はなけれども

ながむる人の心にぞすむ。

と読んでおられます。

後ろの両脇にお飾りしてあります額をご覧下さい。観音様の横に「如来の光明は遍く十方世界を照らして念仏の衆生を摂取して捨てたまわず。」と書かれた書ががざいます。

また勢至様のあちら側には「月影の至らぬ里はなけれどもながむる人のこころにぞすむ」と書かれおります。あの二つの額をよくお読み下さい。

月の光が届いていない所はないのだけれど、その月をながめる人の心によって、その月の光が目で止まるか、心で止まるか違って来るのです。

月の光は誰をも照らしております。その月をながめる私たちの心に「ああ、有り難い」というその光を頂戴するという気持ちが無ければ、本当に美しい月の光で照らして頂いているとは言えないのです。また月を見ているとも言えないのです。月の光は、人を選ばず照らしております。その光を私たちの心の中に受け取れるか受け取れないかは、私たちの心次第という事です。

私達の心の中に月の光を受け取れる受け皿があるでしょうか。月の光に照らして頂いていることさえも気づかずにいるのでしょうか。それとも、あの月の光のお陰で、身をも心をも照らして頂いている自分がいると感謝するのでしょうか。

阿弥陀様の光明に私たちが気がつくという事は菩薩様方のいらっしゃる所を知ると言うことです。そして同じように私達も阿弥陀様にお守り頂いていると言う事に気がつく事なのです。菩薩様のいらっしゃる所に私たちも行きたいと願い、その願いを持ってお念仏「南無阿弥陀仏」と称える人は必ずいけます。阿弥陀様が救いとって下さり、誰一人として決してお見捨てにはならず願いが叶うと書かれてあるのがあの「光明遍照」の文だからです。

「南無阿弥陀仏」とお称えするお念仏は、私達の大切な菩薩様方が阿弥陀様のみ国で阿弥陀様のお導きが有って暮らしておられるから「阿弥陀様私の大切な父や母や又、お顔を見る事もなかったご先祖様方をいつもお守りお導き下さってありがとうがざいます。」「これからもどうぞ私の大切な菩薩様方をお守りお導き下さい。」「そして、私が命終わる時必ず父や母の所に生まれる事が出来ますように」という感謝の気持ちと祈りの気持ちでお称えするものです。

法然上人は身をも心をも月の光で照らして頂けるのはそんな念仏を称える人々なのだとお諭し下さっています。

皆さんご承知のようにただ今林宗院は墓地の補修工事のため墓地内に立ち入る事が出来ません。でも六月の終わり頃だったと思いますが、日が暮れまして、表玄関の鍵もかけ、お灯明を落とした所にインターホンが鳴りました。今頃どなただろう。と思って出ますとそこには途方に暮れた様子で若いご夫婦が立っていらっしゃいました。お墓参りに来たのだけれど、工事中で墓地に入れなかったが母の具合が大変悪いのです。ある友達から「お母さんの看病で君たち夫婦に迷惑を掛けてるので、先に亡くなったお父さんがお母さんを迎えに来てるんだ。だからお父さんに迎えにこなくて良いと墓参りに行ってお願いしてこい」といわれたと言うのです。

取りあえず上がって頂きお墓に供えるために持っていらした、お花・お線香をご本堂にお供えしていただきました。聞けばお母様は病気が絶えなくて長い間胃腸を患って入退院を繰り返したそうです。やっと少し良くなって退院して来たら今度は脳内出血で倒れたというのです。友達に言われた事が気になって、商売が終わって急いで墓参りに来たら墓地が工事中でお参りが出来ず、目の前が真っ暗になった。どうしたらいいかもう判らず、とにかく訪ねてみたという事でした。

「お墓参りは出来ませんがどうぞ、御本尊の阿弥陀様にお参りして下さい。」と申し上げまして「お父様は阿弥陀様のお国にいらっしゃいます。阿弥陀様の両脇にいらっしゃる観音・勢至の菩薩様と同じように蓮の台座にお座りになって阿弥陀様に見守り導いて頂いておられるのです。よく先祖の祟りで病気になったとか、仕事が失敗したとおっしゃる方がいらっしゃいますが、決してそんな事はありません。むしろ反対です。お父様は阿弥陀様のお国にいらしてお母様や皆さんの事を心配して見守っていて下さるのです。もっと大変な事になる所を、軽くすませて頂いたと思われる方が良いのです。お父様は力及ぶ限りお母様をお守り下さった筈です。それでも守りきれずお母様が倒れておしまいになった事を、むしろ一番悲しんでご自分の力不足を嘆いておられるのはお父様だと思います。菩薩になっておられても未だご修行の身です。出来る事と出来ない事があります。それでも一生懸命に守って下さった結果なのです。私達は気がつかなくてもいつでも、阿弥陀様やご先祖様に見守って頂いているのです。ですから、お父様に対して「お袋を連れて行くな」と手を合わせるのではなくて「守ってくれてありがとう」と感謝の気持ちで「南無阿弥陀仏」とお念仏を称えて欲しいのです」

そう申しましたら、ご夫婦の顔がハッと明るくなりまして「そうですか。おやじは守ってくれていたんですか。だからお袋はあれですんだんだ」とせっぱつまった顔つきから安堵の表情になりました。

それでもやはり、お母様はご病気で辛いと思います。ずっと寝ていらっしゃれば体のあちこちも痛むでしょう。そういう時はどうぞ「南無阿弥陀仏」「南無阿弥陀仏」とお称えしながら体をさすってさし上げて下さい。阿弥陀様はお念仏を称える人のところにいつもご一緒にいてくださいますからと、そうお話をしてお見送りしました。

お帰りになる後ろ姿を見ておりましたらまた振り返って「奥さん、ナムアミダブツですね。」と確かめるようにお尋ねになりました。そうです「ナムアミダブツです。」そう言ってお別れしました。

九月に入りお彼岸となりましたが、墓地の工事のためまだお墓参りは出来ません。ですから、お中日を挟んだ三日間は本堂でのお勤めをさせて頂きました。法要・法話が終わりまして「よろしければ、書院でお休み下さい。」と声を掛けて、人の流れが落ち着いた所で書院に顔を出しますとなんと、あの時のご夫婦と、手術の傷口を隠すために帽子をかぶったお母様がそこに座って私を待っていて下さったのです。

「お陰様で退院できました。本当に有り難うございました。是非母の顔を見て頂きたくて連れてきました。教えて頂いたように点滴で青くなった腕や、背中が痛いと言うもんでお念仏を称えながらさすってやりました。母も一緒にお念仏を称えました。それが良かったんでしょうか。ここまで元気になれました。」息子さんは本当に嬉しそうに、帽子で半ば隠れそうになっているお母様の顔を覗きながらそうおっしゃいました。

「本当によかったですね。お念仏を称えて下さったんで、阿弥陀様の光明が皆さんのお心を明るく照らし続けて下さったのですよ。その事によってお母様のお気持ちにも変化があって、息子さんご夫婦のお気持ちも明るくなれたのでしょう。皆様のお気持ちが、良い方向に向かれてそれが一番良かったのですね」と申し上げました。こんなうれしいお話が聞けて私にとっても大変有り難いお彼岸の一日となりました。

お念仏は奇跡が起こったり、病気が治ったりする不思議な呪文ではありません。お念仏を称えたから病気が治ったのではなく、お念仏を称える事によって称える私達の心の内が変わるのです。ですから、自分の為にも、よくよくお念仏をお称えしなければなりません。

阿弥陀如来の光明は　遍く十方世界を照らして

　　　　　　　　　　念仏の衆生を摂取して　捨て給わず

阿弥陀様の光明は念仏をお称えする者、全ての心を明るく照らし救いとって下さるのです。

月影のいたらぬ里はなけれども

　　　　　　　　　　ながむる人の心にぞすむ

そして阿弥陀様の光明に救いとって頂けるかどうかは、阿弥陀様の光明をどうぞ救いたまえの心を持ってお念仏を称えられるかどうかだと法然上人はおっしゃっています。お話しいたしましたご家族のように阿弥陀如来の光明に気がつくだけで感謝の気持ちが生まれ、尚心をも明るく照らして頂けるのです。そうなる事によってすべての事が少しずつ良い方向に向かって行くと言う事は皆さんにもご理解頂けると思います。

空気が澄んで月がとっても綺麗に見える季節になりました。月が輝いておりましても街の灯かりや車のライトでその月の光をとかく見失いがちな私達です。気がつかないでいる私達でさえ月の光は、人を選ばず照らしていてくれます。そして、気がつけば必ず月の光は私達の心に沁みてきます。阿弥陀様の光明も私達がその光明に照らし続けて頂いていた事に気がつけば、「ああ、有り難い。」と感謝の気持ちでいっぱいになります。「南無阿弥陀仏」とお称えすれば、意図せずとも心は明るく照らされます。

本日の法要「お十夜」は、お念仏をお称えする私達を決してお見捨てにはならない阿弥陀様のお慈悲に報いる為の念仏会です。十日十夜夜を徹してお念仏すれば、私達がお浄土に行って菩薩となって千年の善根を積むにも勝るといわれております。また十日十夜、一心不乱にお念仏をお称えすれば必ず阿弥陀様を見奉る事が出来るともお経に書かれております。この月が輝きを増す季節に昼夜を問わずお念仏をしましたならば、阿弥陀様の光明が月の光と重なりまして本当に身にも心にも沁みるお念仏を称える事が出来ると思われます。ですが、十日十夜の「お十夜」も時代と共に短くなって現在ではほとんどのお寺で一日限りの「お十夜法要」となっております。

ならばなおさら、十倍のお気持ちを込めてどうぞお念仏をお称え下さい。ではこれから「光明遍照」の文の後、お念仏を繰り返しお称え致します。どうぞ皆さん大きなお声で皆さんのお気持ちをお念仏に載せて、阿弥陀様に菩薩様方にお伝え下さい。

お念仏称えるところ。そこに阿弥陀様ましまして、私達の心を必ず明るく照らして下さいます。

終わり